

# 成果報告書

記入日 2021 年 4 月 20 日

フリガナ：(マミヤタカネ) 氏 名： 間宮鳳音	渡航先国名 タイ	留学先の所属機関：Language Institute Chiang Mai University 帰国後の所属機関：津田塾大学
研究テーマ：タイ北部山岳地域におけるケシ代替作物の導入と少数民族の生活変容		
研究期間：2020 年 3 月～2021 年 3 月(1 年 1 ヶ月)		
<p>研究成果（概要）</p> <p>かつてケシ栽培で生計を立てていたタイ北部山岳地域の少数民族の人々の生活は、代替作物の導入後どのように変化していたのか。コーヒー栽培農家に焦点を当ててインタビューを行った結果、インフラの整備に伴い農業だけでなく新たなビジネスを展開することで、指摘されていた問題を克服し生活を向上させようとしていることが分かった。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p>&lt;はじめに&gt;</p> <p>タイ北部の山岳地域に居住している少数民族の人々はかつて、アヘンやヘロインの原材料であるケシ栽培の主な担い手であった。他の作物と比較して保存性の高いケシは、その換金性の高さから現金収入の主要手段となり、彼らはそれに依存するようになった。しかし、1964 年プミポン前国王の主導のもと、発足したロイヤルプロジェクトを皮切りに、タイ国内におけるケシ栽培は根絶され、貧困削減に関して、一定の成果を上げたと言われている。しかし、代替作物として生産されたコーヒーやお茶などの品質の低迷、若者の農業離れや依然として貧困度が高いなどということが指摘されており、今後の彼らの持続可能な農業での生活向上が危うくなるのではないかと懸念されている。</p> <p>今回の留学では、ケシ代替作物の一つとして導入されたコーヒーに焦点を当て、コーヒー栽培に従事する農家二組と、コーヒー栽培の支援活動を行っている日本人女性へインタビューを行った。そこから、ケシ代替作物の導入後、彼らの生活がどのように変化したのか。また、指摘されている問題の現状を把握し、どのように解決していこうとしているのかを考察する。</p> <p>&lt;インタビュー対象者&gt;</p> <p>タイ北部の都市であるチェンマイに位置する、ドイパイ村とメーガンポン村の二つの村でコーヒー栽培に従事する農家各一組ずつ、チェンライ県メースワイ郡ターコー地区で支援活動が行われている日本人女性の方にインタビューを行った。</p> <p>&lt;ケシ栽培からコーヒー栽培へ&gt;</p> <p>彼らがケシ栽培を断念した大きな要因の一つは、政府の取り締まりが強化されたことであった。ケシ</p>		

栽培を行っていた当時は、契約農家のような形をとっており、各農家に買取に来るため、自分たちで栽培したものを持って山を下りるなどの手間がかからなかった。加えて価格も安定していたため、労働に見合った、もしくはそれ以上の報酬を容易に得ることができていた。しかし、政府による取り締まりが強化されると、軍がヘリコプターで村を訪れては、強制的に伐採を行った。時には、村人と撃ち合いになることもしばしばあったそうだ。当時、彼らはかなりの抵抗をしたが政府に反発し続けることはできず、ケシ栽培を断念し、代替作物の栽培などに徐々に切り替えていった。コーヒー農家の方からは、コーヒーでの収入は安定してきてはいるものの、それでもケシでの収入の方が若干良かった。しかし、今ケシをタイで栽培しても、警察などにすぐに見つかってしまい罰せられるため、ケシを再び栽培することはできないという声があった。

#### <コーヒーの品質低迷と化学肥料の使用>

タイ産のコーヒーは高品質と謳われている一方で、品質が低迷しており決して高品質とはいえないという指摘もある。その理由としては、ロイヤルプロジェクトが各農家からコーヒー豆を買い取る際に、品質による等級分けがされておらず、品質の良し悪しに関わらず、それなりの価格で買い取ることが挙げられる。そのため、各農家は品質を向上させることよりも、化学肥料を使用して、生産量上げることに力を注ぐ。

これについて、コーヒー栽培支援活動を行っている方へのインタビューから以下のことが分かった。

- ①化学肥料を使用することで、生産量を増やすことができるというのは確かにメリットである。
- ②化学肥料を多量に使用することで土がもろくなり、土砂崩れなどの原因となり自然との共生が難しくなる。
- ③一度化学肥料を使用すると、年々使用料を増やしていく必要がある。そうしないと、実の付きが悪くなったりなどし、結果的に経済的な面で負担が出てくる。
- ④農薬や除草剤に関しては、木自体がだめになってしまったり、消費者の健康面にも問題が生じる。

このように、化学肥料を使用し生産量を増やすことで収入は一時的に上がる。しかし、持続可能な農業という点では多くの問題があり、生産量を増加させることで収入を上げるのではなく、品質を向上させることで収入を上げることが、環境面においても、今後の彼らにとっても必要不可欠であると言える。

しかしロイヤルプロジェクトに、生産しているコーヒーを販売している農家は、手間暇をかけて品質を向上させたとしても、その労働に見合った報酬を得ることはできないのが現状である。支援団体の手が入っている地域であれば、コーヒー豆の品質が高ければ高いほど収入も上がり、農家の人々も量より質を大事にするという良い連鎖が生じる。現に、インタビューをした方が支援している地域(以下ターコー地区)ではそのような連鎖ができ始めている。この問題を解決するためには、各農家が支援の手をただ待っているだけでなく、自ら支援団体に助けを求めたり、消費者に情報発信をしていくことが必要であるだろう。

#### <若者の農業離れと今後について>

2013年の調査で、北部山岳地域の住人、特に若者の農業離れが問題であると指摘された。プロジェクト発足時の農家の子供などが、農業ではなく、近隣の工場や建設現場で日雇い労働を選択するようにな

ったのである。ケシ栽培を止め、代替作物を栽培するようになったものの、きつい労働に見合う報酬が得られず、見切りをつけてしまうというケースが多発した。また、2013年の法改正により、最低雇用賃金が上がったことも、それに拍車をかけることとなった。ターコー地区においては、10～20年ほど前には、農業に見切りをつけ家族ごと町に移住するケースが多く見られたという。これによって、一時は農業人口が高齢化をたどり、彼らの生業である農業が続けられなくなってしまうのではないかと、懸念された。

しかし、近年になってリターンし山に戻ってくる若者が増加しているという。その理由としては、以下の3つが挙げられる。

- ①道が舗装され、宅配便が使えるようになった。
- ②インターネットが使用できるようになり、情報発信ができるようになった。
- ③村で生産した作物などをもとに観光開発が進んだ。

以前は、栽培した作物をロイヤルプロジェクトなどに販売するという、単純な方法でしか利益を得ることができなかった。しかし、インフラが整備されたことで、農家自らが、農作物の存在をアピールできるようになった。それに付随して、お茶摘みなどの体験や、山地民の生活が体験できるゲストハウス運営、村で生産したコーヒーやお茶を使ったカフェなど、様々なビジネスを展開するようになった。つまり、パソコン一台さえあれば、「やる気とアイデア次第」で山にいても、十分に生活できるだけの収入を得られるようになってきているのだ。このように、新たなビジネスが展開していけるという認識が広まると、出稼ぎ先から戻り、新たにコーヒー栽培やそれに関連するビジネスに挑戦しようという若者が増加した。一時は、持続可能な農業による彼らの自立が不安視されたが、現在、その問題は解決しつつあると言えるだろう。

#### <まとめ>

今回のインタビューや村への訪問を通して、彼らの状況は常に変化していることを強く感じた。タイ北部の山岳地域は、広い範囲に多くの少数民族の集落が点在しているため、今回挙げた現状は全ての農家には当てはまらないだろう。しかし、山岳地域において、道路や電気などのインフラの整備が整い始めたことで彼らに新たな可能性とチャンスが訪れたのは間違いないだろう。

今回考察した問題以外にも、現在新たな問題が生じている。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、タイ国内の観光客が激減したことである。山岳地域で生産されたコーヒーの多くは、タイ国内で販売・消費されるが、日本人や欧米人の観光客も多く購入していくと話していた。外国人観光客がタイに入国できなくなってしまい、コーヒーの売り上げも落ちてしまっている。加えて、ゲストハウスなどへの観光客も途絶えてしまい、厳しい状況である。収束の見通しが見えない現在、また新たな方法を模索していかなければならないだろう。

## 留学中の生活・研究でのトピックス

留学中は主にチェンマイ大学に通い、語学と文化を勉強した。新型コロナウイルスの影響で、一年のうちの半分ほどはオンラインでの受講となってしまったが、対面での授業が行えていた期間



ドイカムのお寺にて。

には、先生やクラスメイトと共にお寺などに出向き、語学だけでなく歴史や宗教などについても勉強した。授業は外国人を対象としたものであったため、基本的に英語を使って行われたが、授業内ではできる限りタイ語で先生に話をしたり、質問したりするように努めた。また、できる限りタイ人の友人と食事をするなどして、毎日

会話するように心がけた。外出や大人数での集まりに関しては規制があったため、タイ語で映画やドラマを見て、教科書では扱われないような自然なタイ語の言い回しなども勉強した。中止となってしまった伝統行事やお祭りも多かったが、縮小モードでも開催されたものにはタイ人の友人やその家族と共に積極的に出席したことで、現地の人々の「生活」というものを肌で感じる事ができた。

長期休暇を利用して、規制の範囲内で移動し、フィールドワークを行った村などに出



ドイプイ、モン族の村にて。

向いた。新型コロナウイルスの影響で、留学前に計画していたものが上手くいかなかったことは悔しかったが、臨機応変に行動できたと思う。フィールドワーク先では、インタビューだけでなく、観光やコーヒーの摘み取り作業に参加し、文献を読むだけではわからない、話を聞くだけではわからないようなことも、自分の目で見る事ができた。



アサハラブシャーと呼ばれる宗教行事。



## 今後の社会貢献

長年の憧れであったタイでの留学の実現、コロナ禍の中であったのにも関わらず、このような充実した1年間を送ることができたのは、松下幸之助記念志財団の助成に支えていただけたからである。

知り合いや友人のあてもない初めての地で、簡単な会話も満足にできず、文字も読めない中、アパートの契約から留学生活はスタートした。最初は文字を覚えて授業についていくだけで精一杯だったが、次第に慣れ、授業だけでなくドラマや映画、友人との会話などから言葉を学び、少しずつタイ語でコミュニケーションが取れるようになっていった。それにより、親しい友人ができ、友人家族と食事や年中行事を共にすることで、文化や習慣、ものの考え方なども知ることができた。今回の経験から、改めて人と関わることの素晴らしさを学んだ。

将来は、日本語教師となりタイと日本の懸け橋になれるような存在になりたいと思う。私一人にできることは、そう多くはないかもしれないが、この人に出会えたおかげで世界が広がったと感じてもらえるような人材になるために、これからも努力していきたいと思う。